遊女宮木の入水

田川邦子

昨年の秋学会行事の合間半日を使い、四五人の友人と慌しい神崎探訪をこころみたのが、この一文を草するきっかけである。といっても何か特筆できる成果を得たというわけでもない。

これより半月ほど前、これも偶然伏見の町を歩く機会があり、その時眺めた町のたたずまいと、神崎の雰囲気が非常によく似ていたのにまず驚いたのであるが、それはひとくちに言えば空しい明かるさというようなものであるだろうか。共にかつては交通の要路にあって河岸に栄えた水駅である。町並の印象が似ているのは当然かもしれないが、多くの人が集りまた去って、歴史的社会的役割を果し畢えた場所特有の、人間の残した乱雑さ、しどけなさがあり、そしてそれ故にまたなつかしさがあるという点でも共通していたのである。

神崎は尼崎市の南端にあるが、対岸の大阪市淀川区加島は、上田秋成が四十歳頃からしばし隠棲の居を定めた処で、ここで医を修め『雨月物語』の推敲をし、『竹取物語』の講義などもしたという。加島に今もある香具波志神社は別名加島神社ともいうが、この神を秋成が生涯尊崇してやまなかったのは、養父以来の信仰を受け継いだのと、幼時彼の難病を救済した神であったからだ。

同行した若い友人たちはみな上田秋成の熱心な讃仰者で、いくつかの論文や著書ものしており、神崎探訪を思い立ったのも、加島・神崎周辺は、秋成がしばしば文学的散策をこころみた土地であるからだ。いうまでもないがこの近辺は神崎川の下流に位置し、古代から中世のなか頃までは、京都から山陽、南海、西海道、さらには朝鮮中国大陸方面につながる舟航の要地で、少し上流の江口と共に遊女たちが沢山集っていたところである。

上田秋成が生涯心にはぐくみ、何回か作品に書いた理想の女性「宮木」は、古代この近辺に居た遊女の名で、古くは大江匡房の『遊女記』にも「蟹島（加島）則宮城為宗」とその名が見え、『後拾遺和歌集』にも「遊女宮木」として歌一首が入っているから、この二人が同一人物であるかどうかは分らないが、伝承にのみ名を残す架空の人名とはいえない。遊女「宮木」に事寄せる文章として、秋成には小説としては「浅茅が宿」（『雨月物語』）と「宮木が塚」（『春雨物語』）、さらに『藤簍冊子』には「見神崎遊女宮木古墳作歌」（長歌）、「由利阿気川橋柱硯台銘幷序」などという文章もあり、

遊女宮木への執心は、壮年から晩年に至るまで息が長い。宮木は作者秋成の聖女だったのである。壮年以後の秋成はほとんど流浪者のような生活をしているが、神崎加島は彼には思い出深い故地であった事とこれは無関係ではないように思う。特に晩年『春雨物語』に書いた「宮木が塚」は、この地に伝わる遊女の入水伝説に促されて筆を執ったもので、作品の末尾には、三十年も昔に遊女塚を探し求めて詠じた長歌を附しており、彼の遊女宮木、さらに神崎加島への深い思いをしのばせるところがある。

しかし私はここで秋成の作品を論じるつもりはない。秋成については、先学の詳しい研究や作品論が数多くあるから、そちらに譲った方がよいだろう。ただ秋成が関心を持った神崎の遊女の伝説をはじめ、多くは古代にまで遡る水辺の遊女たちの物語が、さし当って今の私の関心事なのである。

秋成が「宮木が塚」の素材にしたのは、神崎の地に古くから伝える、宮木をはじめとする五人の女の入水伝説で、分類学的に整理すれば圓光大師（法然上人）伝説の一つということになるかもしれない。それほど遠くない室津には、『法然上人絵伝』にも載る、有名な室の遊女の往生譚があるから、室と神崎双方に似たような、法然上人と遊女の物語が残ったともいえる。

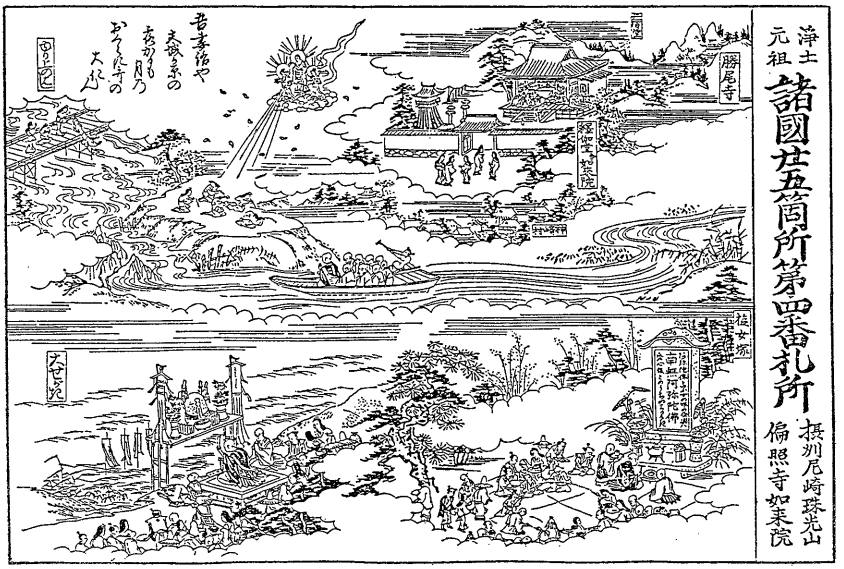
神崎には「元禄五年」の記銘がある、立派な笠塔婆の遊女塚があるが、これはもう度々紹介されていてよく知られているものだ。江戸時代なか頃から土中に埋れて行方不明になっていたのを、明治になってから掘り起したものだと、地元の古老はいっていた。土中に埋れたのは何時頃か、秋成がこれを見ていたかどうか、そこまで詮索する余裕は今の私にはない。

尼崎市内の寺町にある如来院は、もとは神崎川の近くにあった古刹で、五人の遊女の入水伝説はこの寺が伝えており、遊女たちの遺髪というのもこの寺にある。現実目の前にする女の髪の束はかなり古ぼけてはいるが、これを法然上人建永二年（一二〇七）まで遡らせて考える人はまずいないだろう。

その他如来院には、神崎の遊女塚と形状が非常によく似て、ひと囲りは大きい。やはり六字の名号を刻んだ、かなり古い碑があるのが気になった。（側面の文字は全く判読できない）。また五人の遊女の入水や大施餓鬼を描いた、「浄土元祖　諸国廿五箇所第四番札所　摂州尼崎珠光山偏照寺如来院」なる版木も伝えている。（64頁挿絵）

法然上人が讃岐の流謫の地に赴く途上の物語という点では、室の遊女と神崎の遊女の物語は共通しているが、細部にはかなりの違いもある。少し長くなるが「如来院略縁起」を引けば、左の通りである。

（法然）上人鳥羽より川船に召され、神崎の浦に船宿りし玉ふ時、此所の遊女あまた有りし中に、あすまみやきかるも小倉大人とも五人の遊女は、ときの人の哥にも、あづまぢやみやきの原の露かるも月の小倉にうたの大人とよめるとかや、此者共上人の御船へ推参して、教化を願奉る。上人いと殊勝成事に思召、厭離穢土欣求浄土の法門を念頃にしめし玉へば、一念発起してたけなる黒髪を切、手箱に入、上人へさゝげ出家遁世を願奉る。其至誠心を感心ましまして、頓而出家させ、法名を改十念をさづけ玉へば、難有御暇を申、立出しか、世をあぢきなくおもひしにや、其まゝ



五人一所に神崎川の橋より、念仏の声ともに入水して、空しく成りぬ。紫雲空にたな引、異香四方に薫し、不思議の勝瑞有ければ、人々驚き橋の上より是を見れば、上人教化に預りし五人の尼也。水は下へ流れ、なきからは川上へゆりあげ橋杭へかゝる。今にゆりあげの橋と云ひ伝るは是也。皆々打寄り、むなしきからをとりあげ見れば、合掌みださず、あめるがごとくにて有しと。上人此由を聞し召、ふびん成事におぼしめし、前所といふ野辺に送り、五人一所に葬り、塚をつき、あかうし玉ふ。（以下略。句読点は筆者）

つまりこれは初めから、〈入水〉と〈死〉の影が色濃く纏いつく物語である。

室の遊女の往生譚は、「いかなるつミありてか、かゝる身となり侍らむ。この罪業おもき身、いかにしてかのちの世たすかり候べき」とか、「さやうにて世をわたり給らん罪障まことにかろからざれハ、酬報またハかりかたし」「弥陀如来ハ、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をもたてたまへる事にて侍れ、たゝふかく本願をたのミて、あへて卑下する事なかれ」など、遊女と法然の問答は念仏思想に基き、理路整然と展開される。教団側が整理した往生譚であろうから、これは当然かもしれない。かくて室の遊女は法然の教化を受けて出家遁世、ひと筋に念仏し、やがて往生を遂げたというから、念仏宗の宗教説話としては、こちらの方が正統である。神崎の方は水の女の死の物語であって、法然の名は後から加わったものかもしれないし、法然でなくてもよいと思われるのは、正確には念仏往生譚になっていない、古い俤が透けて見えからである。

水に縁の深い「ゆ（淘）りあげ」という言葉も、見逃すことがで

きない。「如来寺略縁起」では、五人の遊女の入水話のあとには、必ずその屍が上流に押し上げられ、橋にかかったとする物語が加わり、物名起源説のような締めくくりになる。如来院にはゆりあげ橋の橋柱で造ったとする「勢至如来像」があり、秋成も「由利阿気川橋柱硯台銘幷序」を草している。とにかくゆりあげ橋の木片は、地元では今でも聖物視されているのである。

遊女塚の近くに住む一老婆が「ゆりあげ」の謂を説明し、洪水や身投げで死骸が浮上するとき、河上で発見されればそれは極楽に往生できた証拠で、川下に屍が流されれば、極楽往生できない人だとする、古い言い伝えがあるのだと言っていた。おそらく潮の干満がひき起す現象だと考えられるが、大水害による受難の記憶や、世をはかなんで入水した遊女たちの死の物語が、幾重にもオーバーラップして、それが「ゆりあげ」の一点に象徴化されて行ったのではないだろうか。

遊女という対象化された〈性〉を生きる女たちは、普通の女にとっては近くて遠い存在である。彼女たちはほとんど何も語らない。古代から近世まで、文学や芸能に現われる遊女の数は数えきれないほどなのに、それらはほとんど男の手により書かれたもので、彼女たちの心の内奥へ分け入ることに成功したものはあまりない。それは彼女たちが対象化された性として、男たちの欲望を映しとる鏡であることを強要されていたからであろう。美貌教養芸能共に、並はずれて優れていた一群の遊女たちが、特に近世の初期には沢山現われたが、その素質や才能も、男たちの求める快楽や美、欲望に奉仕するために浪費されるのみで、歌集の一つも残さなかったのは、いかに屈折した不自然な生を生きていたかの証になるだろう。

ただこのなかで中世の遊女のみは少し異なるところがある。古代以来の巫女の流れに遊女の起源を見るのは、今や常識になっているが、それは彼女たちの特技であった、神を饗応する舞踊や音楽が、中世になって大きな開花を見たからである。古代的な託宣や神がかりが、芸能行為に代替され、むしろそちらが目的のようになっていくのであるが、それでも彼女たちは神に奉仕する聖女であり、また神の申し子であるとする意識を失っていない。むしろ内面的には巫女の属性をはっきり残していて、信仰は物神両面で生活の依り所であったから、その神仏を讃仰する芸能行為には磨きがかけられ、彼女たちの夢や憧れ、欲望などがそのまま投影されたと思われる。曽我兄弟や源義経などの貴種英雄と巫女のロマンスなどはそのよい例で、これらが後世の文芸や芸能に与えた影響は大きい。

中世の巫女（遊女）のもう一つの特徴に、多くは放浪漂泊の生活をしたことが挙げられる。もちろん無秩序野放図な拡散的放浪ではなく、信仰圏によるテリトリーはあったと思われるが、定住者ではなかった。これが後に賤民視される原因になるのだが、旅回りで技が鍛えられる、芸能者特有の利点はあったはずである。放浪漂泊は中世的特色で、白拍子、傀儡女、歩き巫子など女の芸能集団ばかりでなく、琵琶法師、猿楽、田楽など男の芸能集団も、多くはまた漂泊の徒であった。日本には神は外界からやって来るとする、客人（まれびと）信仰が根強いから、放浪は信仰と芸能が結合していた時代には、欠かせない条件であったわけだ。

旅を日常とするのは、女にとっては相当厳しい生き方である。しかし行動の自由がもたらす精神的な利点には、無視できないものが

ある。和泉式部が上臈たちと連れ立ち書写山に性空を訪れたり、(『三国伝記』)、浄瑠璃姫が大天狗の翼に乗って大空を飛行する(『十二段草子』)などは、女たち自らが描いた飛躍と飛翔の夢であったに違いない。閉された生活からは生まれようのない、奇想天外な、しかしまことに正統な夢物語なのである。

古代水辺の遊女については大江匡房の『遊女記』があり、貴族の日記の端々にも記録は残るが、文学の世界に登場するときは、僧侶と向き合う場合が多い。それも教学の堂塔に籠り権門に出入りする高僧知識ではなく、性空、西行など回国遊行を事として俗世と交わる聖系の人々、また法然、一遍、空也のような念仏宗系の僧である。『後拾遺和歌集』 第廿

書写のひしり結縁経くやうし侍けるに人々あまたふせをくりける中におもふ心やありけんしはしとらざりければよめる

遊女宮木

つのくにのなにはのことかのりならぬあそびたわふれまてとこそきけ

は、神崎の入水の遊女「宮木」の名が、勅選集に見えることで注目を引くが、これも贈歌の相手は性空である。「法」と「遊び」の間に想定される緊張関係が露わに出ている点で、ひとまず実際の空気を反映していると見てよいだろう。

性空の伝記は空想で紡いだようなところが多く、不可思議な挿話に満ちているが、なかにも『古事談』『十訓抄』『撰集抄』に見える、生身の普賢菩薩を、神崎の長者に見る話は有名だ。遊女を菩薩と錯覚する通俗的物語ではなく、神崎の遊女の長者は、元来普賢菩薩であったとするところに特徴がある。長者は性空にその真実を明かした後、「不可及口外」(口外に及ばざれ)というや、その場に逝去したというのも、単なる遊女の往生譚とは異なる。遊女の聖性と、性空の宗教的個性の間に存する緊張関係が描かれていて、次元は異なっても『後拾遺集』と共通するものがあるといってよいかもしれない。遊女や遊びの中に本来的に聖性、また宗教性を見る発想があったことをこの説話は物語っていて、観音廻りをするお初(『曽根崎心中』)が、観音菩薩に変身するのもこういう伝統の流れに立つといえる。

性空と遊女の説話が神話性を持つのに対し、西行と遊女の交渉は人間的、また文学的である。江口の遊女と歌や連歌を交わし、「仏の大きに戒め給へるわざをする」遊女が、「多く往生をとげ、浦人の物の命を断つものの中に、終をいみじき事おほく侍り。こは、さればいかなる事ぞや」(『撰集抄』)と、人間を冷静に見つめるところがある。答えとして「たゞ心にうべきにや。露命をつがんとてのはかりごとに侍れば、心にもあらず、これに交りかれにともなへども、これに心を移さずかれに心をしめで、つねに後世の事を思」っているので、往生を遂げるのだろうと考えるあたり、その認識は冴えている。こうして西行説話を通して見るとき、江口の遊女には神秘性もなく、詩歌の才と宗教的自省心の強い、西行生写しのありのままの女があるだけなのである。後の謡曲『江口』は、性空的幻想に遡行しており、「歌舞の菩薩」の示現を見るが、これは能の夢幻的構造が、基本的にはシャーマンの神降しという、古代的な形をとるところから来ている。

中世回国遊行をして唱導文学を伝播した、いわゆる歩き巫子的遊

女より、古代から中世水辺にいた遊女の方に、むしろ人間の素顔が見えがちなのは、馴れ親んだ西行説話の故かもしれないが、もう一つは彼女たちが、語るに足りる、数奇な運命の神、または個性的で威力のある神々を持たなかったことによるのではなかろうか。『遊女記』には、「尸倶羅之再誕。衣通姫之後身」とあり、一名「道祖神」の「百太夫」を祀り、広田や住吉に「祈二微（徴）嬖一」（客から呼ばれることを祈る）と書くが、百太夫は神としては微弱すぎるし、広田や住吉は王朝貴族の信仰があった格の高い海の神である。遊女たちの信仰は貴族に倣ったもので、現世利益を祈るのに止まったのではないかと思う。

水は決してそれ自身のあり方を超越することはできない。つまり、形をとってあらわれることはできない。水は潜在性、萠芽、潜勢力、という条件を克服することはできない。（『豊饒と再生　宗教学概論2』）

とエリアーデはいう。そして

およそ形あるものは、水を超越し、水から離脱して、自己を表わす

とも。江口・神崎の遊女たちが、水辺の女であったことはいうまでもない。折口信夫は禊ぎを助ける神女が物忌みの後、みづのをひもを解いて「神の嫁」になることを述べている（「水の女」　全集第二巻）。水・女・禊・性交というのは、水の女の総体を表わす属性で、女のもっとも古代的な在りようを示している。

江口・神崎の遊女について詳しい研究を残した滝川政次郎は、遊女の巫女性については否定する立場をとるが（『江口・神崎』）、これは古代この近辺が交通の要路で、人の出入りが激しく、物質的にも潤沢であったことから、日常の状態では遊女の存在に聖性を予感し得る社会条件が乏しく、表面からは殆ど何も見えないことによるのではなかろうか。ただそれは彼女たちが近代的意味で、ただの娼婦であったとする根拠にはならない。巫女性は意識の底に眠らされており、その事自体に苦しむこともあり得るからだ。訪れる神さえあれば、いつでも神の妻、神の子になれるのが古代中世の女たちであるからだ。

「水は決してそれ自身のあり方を超越することはできない」というのは、水の象徴性の謂であるが、同時に水神に奉仕する巫女から、水辺の遊女までを包括する特性にも通じている。民俗的に見ても禊に奉仕する水の女は、特別な例を除けば、次第に卑賤な位置に格下げされる傾向があったようだ（折口信夫前掲書）。それは水とのかかわりが、生きるための手段に転化するとき、決定的になるようだ。水の辺の遊女はその代表的な例ではなかろうか。女の性の自然性が、水の自然に重ね合わされるとき、彼女たちは水の魔性に吸引され、その無規範無定型性に浸潤同化されてしまう。無思想（依拠できる個性的な神を持たない）、無秩序（『遊女記』にはその有りさまが書かれている）、そして哀れで悲しい、憂き河竹の流れに身を委ねる賤業とならざるを得ないのである。

水辺に縛りつけられた女たちが、低い水面から対蹠的位置にある山の高みを仰ぎ、精神的救済を求めるのは、人間の精神のありようとして当然の成り行きと思われる。水の無規範無限定性に浸れきった彼女たちには、救済の対象を他に求めるより他に道はなかったのであろうから。まさに水はそれ自身のありかたを自力では超越できないのであった。

こうして書写山の性空が、彼女たちの関心の対象に選ばれたのであろう。「くらきより闇き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月」（『拾遺集』）は、和泉式部が性空に贈った歌であったが、『発心集』では遊女が僧侶に結縁を求めて唱う、鄭曲となっている。月の美しい夜の海上を、遊女の舟が僧侶の舟近く漕ぎ寄せ、結縁の鄭曲を唱うのである。おそらく空には書写の山も望まれたであろう。この説話が表現する詩的絵画的構図は、美しいという以上に、水の女の精神世界を描くものとして注目されてよい。

性空が水の女の心を山に誘うのに対して、法然は水そのものに向けさせる。念仏往生の思想は死を凝視する思想でもあり、入水死は水の女が西方浄土へ向かうには、いちばん手近かな方法であったからだ。

入水が往生の手段としてどのように評価されていたかについては、今の私には何も言えない。『発心集』では身燈・入水を疑問視する意見を述べているから、長明のような心ある人には受け容れ難いものだったかもしれない。その『発心集』には娘に先立たれた失意の女房が、天王寺に参り、難波の海で入水往生を遂げる話が、美しく描かれる。しかしその後の「蓮花城入水の事」では、入水する瞬間に後悔の念が生じ、往生できなかった僧が、亡霊に姿を変えて友人を訪れ、引き止めてくれなかった恨みを述べる話を載せている。

『沙石集』では念が入っていて、何回か入水を繰り返した上人が、その都度妄念を起して失敗し、最後に往生を遂げるのである。どうやら入水往生は男には難く、女には容易であったようだ。

折口信夫は自殺の方法として、身投げで死ぬ事の初めを開いたのは、丹波道主貴（ニニチ）（「垂仁紀」）の神女で水の女であったと記す（前掲書）。『雨月物語』の宮木の哀話の末尾に、秋成が書き加える、真間の手児奈の入水の話も、〈宮木〉の名が呼び起す文学的連想によるものであった。手児名は『万葉集』が伝える水の女（遊女）の悲劇と見てよい。

仏教が念仏の思想と共に大衆化した、古代末期から中世にかけては、水の女遊女が聖なるものに再生するには、念仏往生と入水、この二つが考え得る道であった。この時性空や西行は去り、法然が女たちの前に姿を現わすのである。室津と神崎にそれぞれ伝わる遊女往生譚も二つの形をとるのであるが、法然を中心に見ていた私は、『絵伝』にもあるような室の遊女の往生譚に、正統旦つ端正な姿を見、神崎の遊女の入水譚には何か釈然としないもの、つまり土俗臭の強い傍系説話のような感じを持っていたのである。

しかし水の女の再生はやはり水に依るしかない訳で、これは古代からの約束であった。五人の遊女が同時に入水するのが、神崎伝承の特色であるが、「垂仁紀」では后に上る水の神女も五人姉妹である。禊で神に奉仕する女神（巫女）は、神女群として複数で考えられる場合が多いのは、その遊舞（あそび）が群遊であったからだと折口はいう。

秋成の宮木は普賢菩薩や歌舞の菩薩、歌を詠む才女ですらなく、恋人を殺した男に肉体までもてあそばれて、屈辱的な生に絶望する女である。遊女の聖性は人間性に代わり、人間であることと遊女であることの間に引き裂かれて、死を選ぶ女ということになれば、これはもう近世小説の域を越えているといえるかもしれない。